

令和三年 統一模試 新中学三年春期テスト (実施時間五十分間)

国語

注意

- 1 問題用紙は表紙を入れて八ページあり、これとは別に解答用紙が一枚あります。
- 2 監督者の指示に従って解答用紙を取り出し、番号と氏名を解答用紙及び問題用紙の決められた欄に記入しなさい。また、解答用紙の「QRコードシールをはる」と書かれたわくの中に、シールをはみ出さないようにはりなさい。
- 3 監督者の「始め」の合図があるまで開いてはいけません。
- 4 答えは、問題の指示に従ってすべて解答用紙の答えの欄に、はみ出さないように記入しなさい。
- 5 筆記用具は、HBかそれよりも濃いものを用い、文字がうすくならないように注意しなさい。
- 6 監督者の「やめ」の合図ですぐにやめなさい。

氏名

1 次の1・2の問いに答えなさい。

1 次の——線部①～⑥の漢字は仮名に直し、カタカナは漢字に直して書け。

この春、私は最終学年の中学三年生になります。今年は「受験」という人生の岐路に立つ年なので、部活や学校行事だけに時間を費やすのではなく、日々の授業や自主学習を大切にして、学習面においても精進したいです。そして、今年は高校生活をスタートさせるための土台作りの一年だということをネットウに置き、この一年がユウイギなものになるように、きちんと計画をネろうと思います。

2 次は、1の文章中の漢字を行書で書いたものである。楷書で書くときと比べて部首の筆順が変化しているものを一つ選び、記号で答えよ。

ア 終
イ 校
ウ 授
エ 計

2 次の文章を読んで、あとの1～7の問いに答えなさい。

雑誌や写真集などに掲載される美しい溪谷には、必ずといっていいほど森と川が一緒に描かれている。自然の豊かな川で写真を撮ると、どんなに頑張っても森を含めずに川の写真を撮ることは難しい。このことから、森と川は切っても切れない関係にあることが容易に想像できらるだろう。

風景だけではなく科学的にも、最近の研究によって、森と川との密接な関係が明らかにされてきた。これらの研究成果を眺めてみると、河川生態系に与える森林の役割はきわめて多様であることに気づく。多様であるというのは、生態系を維持する多様な機能があるという意

味である。川辺の樹木は、あるときは太陽光線を遮り、また、落葉を川に供給し、隠れ家にもなるといった具合だ。多様な機能と川に暮らす生物たちとの関係を解きほぐしてゆくと、そこには実に巧妙な仕掛けがちりばめられている。生物の多様性を枚挙するだけでなく、多様性が維持されているしくみを理解することが、人と自然の共生を考えうるうえで不可欠である。

さて、博物館には膨大な量の水生生物の標本が収蔵されている。あの標本は、名もないような小さな沢ですつと昔に採集されたものだったり、別のものは最近採集された標本だったりする。a、標本は残されていないが、採集記録が掲載された古い図書資料も収蔵されている。これらを結び合わせると、いまとなっては、豹変してしまつた自然の様相を、復元することができるかもしれない。「昔、この川にはある種類の虫や魚がたくさん生息していたのだから、川沿いの緑は豊かで、水も冷たかつたのだろうな。そうすると、○○川や□□地域にも、たくさん生息していたのではないか。」こんな具合である。博物館に収蔵されている標本は、まさに森と川の記憶を受け継ぐタイムカプセルである。ただし、記憶を呼び起こすためには、何よりも「自然の理解」が必要となる。

北海道の小河川での結果だが、落葉最盛期(約50日間)には、一平方メートルあたりおよそ三〇〇グラム(乾燥重量)の落葉が川に落下する。川幅三メートル、長さ一〇〇メートルの区間で、およそ九〇キログラムの落葉が川に供給される計算になる。(ア)この落葉は、川に生息する水生昆虫たちの大切なえさ資源となる。ふちやよどみに堆積した落葉は、水生昆虫やサンショウウオの絶好の隠れ場であり、同時にえさ場となっているのだ。(イ)川が曲がりくねり、ときおり大きなふちがあり、川底の石と石との間に無数のすき間がある。そして、

枝や樹木の幹が川の中に倒れ込んでいる。(ウ)しかし、川を直線化しコンクリートで固めてしまうと、せつかくの落葉がすぐに下流へと流されて、消失する。少し増水するだけで、川底の落葉がきれいに片付けられてしまうのだ。(エ)水生動物たちがえさにありつくには、河畔の森林だけでなく、川自体の形も重要なのがわかるだろう。

さて、葉が川面にたくさん落ちるといことは、春から夏にかけて、川面上空を樹木が覆っているからである。いわば屋根を付けたような状態だ。そのため、水中に到達する太陽光線が乏しく、光エネルギーを利用して光合成を行う付着藻類の繁茂が妨げられる。付着藻類とは、川床の石の表面に生える藻である。石を持ち上げて観察してみると、うっすらと黒褐色の「膜」が付着しているのがわかるだろう。これが付着藻類であり、主に藍藻、珪藻などで構成されている。付着藻類はきわめて栄養価が高く、アユのえさとしてよく知られている。当然、多くの水生昆虫にとつてもごちそうである。したがって、付着藻類を主食とする生物にとつて春から秋にかけては、森の中の川は決して好適な場所ではない。

③ 一方で、樹木によつて太陽光線が遮られることの利点もある。夏期における川の水温の問題だ。森林の消失によつて水中に太陽光線が射し込むと、川の水温が急激に上昇する。一般的に上流部の川は、水深が浅く流量が少ないので、簡単に暖められてしまう。とくに山地溪流には、冷たい水を好む生物がたくさん生息しており、これらの生物は、水温が上昇すると生息が困難となる。いわば、ずっとお風呂に入っているようなものである。そのうえ、小さなダムがつくられると、川の水は太陽光線により長くさらされるため、影響はより顕著なものとなる。森は日傘の役目を果たし、水温の上昇を緩和してくれるのである。

森から川への影響は、落葉だけではない。樹木そのものも川に倒れこんでくる。いわゆる倒木である。倒木は、先述したように、落葉をひっかかりやすくし、落葉を水中に長く留めるだけでなく、川の地形にも影響を及ぼす。流れを遮るかたちで倒れた樹木は水の流れ方を改変し、大きな岩と同様の働きをする。倒木の周りは水流の作用によつて洗掘され、ふちが新しくつくられる。このようなふちには、倒木による物陰も同時にできるので、魚の好適な生息場所になる。研究結果によれば、倒木量が魚の生息密度に影響すると指摘されている。

立ち返つて考えてみると、なぜ川の中に倒木があるのだろうか。主な理由は、洪水や土砂崩れによる河畔林の破壊である。すべてを破壊してしまふ洪水が、魚の生息場所をつくり出していることは一見矛盾するように思えるが、これこそ自然の巧妙なトリックであり、私たちが理解しておかねばならないことである。

森と川の関係には、まだまだ説明されていないことが多い。しかし、森林の多様性が川の多様性に大きく関連しているのは間違いないだろう。そして、生物多様性が維持されているしくみは実に多様で巧妙である。博物館に収蔵されている数々のタイムカプセルも、**b**うえで貴重な情報源であり、かけがえのない財産になるのではないだろうか。

(三橋弘宗「ふしぎの博物誌」による。一部省略等がある。)

(注) 豹変してしまった!! すっかり変わってしまった。

洗掘II (流水などが) 川底を掘り削ること。

1 線部①「豊かな」と同じ品詞のものを、本文中の——線部

ア〜エの中から一つ選び、記号で答えよ。

2 本文中の **a** にあてはまる語として、最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア だから イ また ウ しかし エ つまり

3 線部②「そこ」は何を指しているか。本文中から十九字で抜き出して書け。

4 次の一文は、(ア) (イ) (エ) のどこに入るか。最も適当なものを選び、記号で答えよ。

そんな自然な状態の川では、ひっかかりが多く、落葉が流されにくい。

5 次の文は、線部③「樹木によって太陽光線が遮られること」の利点もある」について、水生動物にとって、太陽光線が遮られることとの利点と不利な点をまとめたものである。I・II に入る言葉をそれぞれ本文中から十三字で抜き出して書け。

水生動物にとって、太陽光線が妨げられることは I とい
う点で利点であるが、II という不利な点もある。

6 線部④「すべてを破壊してしまう洪水が、魚の生息場所をつくり出している」とあるが、魚の生息場所をつくり出すしくみについて、筆者はどのように述べているか。六十字以内で説明せよ。

7 本文中の **b** にあてはまる表現として最も適当なものを、次から選び、記号で答えよ。

ア 人間が森や川と共存してゆく
イ 洪水による森の破壊を防ぐ
ウ 人間が自然に囲まれて生活する
エ 過去の自然の様相をなつかしむ

3 次の文章を読んで、あとの1～5の問いに答えなさい。

(注) 祖仙、崎陽の人、浪花にすめり。猿をうつして、画名一時に雷同す。
(長崎出身の人で、大阪に) (写生して) (大変有名になった)

世に祖仙の猿と称して渴望するもの多し。其はじめ崎陽に在る日、

者に託して一猿を買ひ得たり。これを庭樹につなぎ置きて、そのかた

はらにありて猿の趣を写すこと数篇にして、つひに絹に浄写し、来舶

の某氏の鑑を乞ふ。某氏のいはく、「**□**、此猿は人家の養育の形

にて山中自在のおもむきにあらず」といはれければ、猶また山中に入

り、切磋すること兩三年、終に其真図を得たりと。

(「仮名世説」による)

(注) 祖仙は江戸時代後期に活躍した画人。

来舶の某氏は外国から渡来したある人。

1 線部①「つひに」を現代仮名遣いに直して書け。

2 線部ア～エの祖仙に関する出来事について、これらが起きた順に並べて書け。

3 本文中の□にあてはまる言葉として、最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア なごむべし イ うらやむべし
ウ 惜しむべし エ 懐かしむべし

4 線部②「其真図を得たり」の内容を説明したものととして、最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア 絵から離れ山中で修行を続け、やっと某氏の言葉の意図をつかめるようになった。

イ 猿を描いた絵が世間から望まれる理由を考え続け、ようやくわかるようになった。

ウ 数年間山中で野生猿の観察を続け、最終的には猿の生態を理解するようになった。

エ 猿の野性の姿を描き続け、とうとう猿本来の姿を描くことができるようになった。

5 次は、本文について話し合っている先生と生徒の会話である。

Ⅰ・Ⅱに適当な言葉を補って会話を完成させよ。ただし、

Ⅰには五字以内、Ⅱには十五字以内でそれぞれふさわ

しい内容を考えて現代語で答えること。

先生 「本文は『祖仙』について述べた文章ですが、この文章か

ら『祖仙』がどのような人物だったと読み取れますか。」

生徒 「はい。『祖仙』は自分の技量にⅠことなく、他人の

批評をⅡことができる人物だと思います。」

先生 「よく理解できていますね。みなさんもぜひ『祖仙』を見

習いましょう。」

4

次の文章を読んで、あとの1～5の問いに答えなさい。

もうすぐ三十歳になる「私」は、中学二年生の頃を振り返っている。中学二年生の「私」は、入院中の祖母がもう長くないことを、母から泣きながら知らされた。それ以来「私」は毎日のように病院に通った。ある時「私」は祖母からある本を探るように頼まれた。

「おばあちゃん、なかったよ」

そのまま病院に直行して言うとおばあちゃんはあからさまに落胆した顔をした。こちらが落ちこんでしまうくらい落胆ぶりだった。

「本のタイトルとか、書いた人の名前が、違ってるんじゃないかって」「違わないよ」^①びしゃりとおばあちゃんは言った。「あたしが間違えるはずがないだろ」

「だったら、ないよ」

おばあちゃんは私の胸のあたりを見つめていたが、

「さがしかたが、甘いんだよ」すねたように言った。「どうせ、一軒いってないって言われてすぐ帰ってきたんだろ。店員も、あんたとおんなじような若い娘なんだろ。もっと知恵のある店員だったらね、あちこち問い合わせて、根気よく調べてくれるはずなんだ」

そうしてふいと横を向き、そのままいびきをかいて眠ってしまった。

私はメモ書きを手にしたまま、パイプ椅子に座って空を見た。季節は冬になるうとしていた。空から目線を引き下げると、バス通りと、バス通りを縁取る街路樹が見えた。木々の葉はみな落ちて、寒々しい枝が四方に広がっている。

すねて眠るおばあちゃんに視線を移す。私の知っているおばあちゃんより、ずいぶんちいさくなってしまった。それでも、もうすぐ死ぬでしようの人のようにはどうしても見えない。また、もうすぐ死んでしまうのだと思っても、不思議と私はこわくなかった。きつと、それがどんなことなのか、まだ知らなかったからだろう。今そこにいるだけだが、永遠にいなくなってしまうということが、いったいどんなことなのか。

その日から私は病院にいく前に、書店めぐりをして歩いた。繁華街や、隣町や、電車を乗り継いで都心にまで出向いた。いろんな本屋があった。雑然とした本屋、歴史小説の多い本屋、店員の親切な本屋、人のまったく入っていない本屋。しかしそのどこにも、おばあちゃんのがさす本はなかった。

手ぶらで病院にいくと、おばあちゃんはきまって a 顔をする。何か意地悪をしているような気持ちになってくる。

「あんたがその本を見つけてくれなけりや、死ぬに死ねないよ」

あるときおばあちゃんはそんなことを言った。

「死ぬなんて、そんなこと言わないでよ、縁起でもない」

言いながら、はっとした。私もしこの本を見つけたさなければ、

おばあちゃんは本当にもう少し生きるのではないか。ということは、見つからないほうがいいのではないか。

「もしあんたが見つけだすより先にあたしが死んだら、化けて出てやるからね」

私の考えを読んだように、おばあちゃんは真顔で言った。

「だって本当にないんだよ。新宿にまでいったんだよ。いったいいつの本なのよ」

③本が見つかることと、このまま見つけれられないことと、どっちがいんだらう。そう思いながら私は口を尖らせた。

「最近の本屋ってのは本当に困ったもんだよね。少し古くなるという本だらうがなんだろうがすぐひっこめちゃうんだから」

おばあちゃんがそこまで言いかけたとき、母親が病室に入ってきた。おばあちゃんは口をつぐむ。母はポインセチアの鉢を抱えていた。手にしていたそれを、テレビの上に飾り、おばあちゃんに笑いかける。

母はあの日から泣いていない。

「もうすぐクリスマスだから、気分だけでもと思って」母はおばあちゃんをのぞきこんで言う。

「あんた、知らないのかい、病人に鉢なんか持つてくるもんじゃないんだよ。鉢に根付くように、病人がベッドに寝付いちまう、だから縁起が悪いんだ。まったく、いい年してなんにも知らないんだから」

母はうつむいて、ちらりと私を見た。

「クリスマスっぽくていいじゃん。クリスマスが終わったら私が持つて帰るよ」

母をかばうように私は言った。おばあちゃんの乱暴なもの言いに私は慣れているのに、もつと長く娘をやっている母はなぜか慣れていないのだ。

案の定、その日の帰り、タクシーのなかで母は泣いた。

「あの人は昔からそうなのよ。私のやることなすことすべてにけちをつける。よかれと思ってやっていることがいつも気に入らないの。私、何をしたらあの人にお礼を言われたことなんかないの」

タクシーのなかで泣く母は、クラスメイトの女の子みたいだった。

母の泣き声を聞いていると、心がスポンジ状になって濁った水を吸い上げていくような気分になる。

その年のクリスマスは冷え冷えとしていた。私が夏から楽しみにしていた母のローストチキンは黒こげで食べられたものではなかったし、ケーキに至っては砂糖の量を間違えたのかまったく甘くなかった。クリスマスプレゼントのことはみんな忘れてしまうようで、私は何ももらえなかった。

そうして例の本も、私は見つけれずじまいにいた。

クリスマスプレゼントにできたらしいと思って、私はさらに遠出をして本屋めぐりをしてきたのだが、そのなかの一軒で、年老いた店主が、たぶん絶版になっていると教えてくれた。昭和のはじめに活躍した画家の書いた、エッセイだということも教えてくれた。それで、そ

れまで入ったこともなかった古本屋にも、足を踏み入れていたというのに。

黒こげチキンの次の日、冬休みに入っていた私は朝早くから病院にいった。見つけられなかった本のかわりに、黒いくまのぬいぐるみを持っていった。

「おばあちゃん、ごめん、今古本屋さがしてる。かわりに、これ」

おばあちゃんはずいぶん痩せてしまった腕でプレゼントの包装をとき、酸素マスクを片手で外してあげて言う。

「まったくあんたは子どもだね。ぬいぐるみなんかもらったつてしようがないよ」

これにはさすがにかちんときて、個室なのをいいことに、私は怒鳴り散らした。

「おばあちゃん、わがまますぎるつ。ありがとくらい言えないのつ。私だって毎日毎日日本屋歩いてるんだから。古本屋だって、入りづらいの

のがなんぼって入ってるんだから。古本屋に私みたいな若い子なんかいないのに、それでも入ってつて、愛想の悪いおやじにメモ見せて、

がんばってさがしてるんだからつ。それにっ、おかあさんにポイントチャアのお礼だつて言いなよつ」

④ おばあちゃんは目玉をぱちくりさせて私を見ていたが、突然笑い出した。私の覚えているよりは数倍弱々しい笑いではあったけれど、それでもすぐおかしそくに笑った。

「あんたも言うときは言うんだねえ。なんだかみんな、やけにやさしいんだもん、調子くるつてたの。美穂子なんかあたしが何か言うときくじらたてて言い返してきたくせに、やけに素直になつちゃつて」

美穂子というのは私の母である。外した酸素マスクをあごにあてて、おばあちゃんは窓の外を見て、ちいさな声で言った。

(角田光代「さがしもの」による。一部省略等がある。)

1 本文中の「a」にあてはまる語として、最も適当な言葉を本文中から四字で抜き出して書け。

2 線部①とあるが、これはおばあちゃんのどのような言い方を表しているか。最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア 相手に対して不平や不満をぶつけて言う様子。

イ 相手の細かな欠点を取り上げて悪く言う様子。

ウ 相手の言葉を容赦なく否定して厳しく言う様子。

エ 相手が誰であろうと遠慮せず荒々しく言う様子。

3 線部②とあるが、この表現について説明したものととして、最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア 葉をすべて落とした街路樹は、おばあちゃんの期待に答えられないことをさびしく思う「私」の気持ちを表している。

イ 冬の空の下に立ち並ぶ木々は、ちいさくなつたおばあちゃんに刻々と近づく死を恐れている「私」の気持ちを表している。

ウ 木々の四方に広がる寒々しい枝は、メモ書きされた本を調べるあてがなく困り果ててしまう「私」の気持ちを表している。

エ 窓の外に広がる冬の街路樹の風景は、すねて眠つてしまうおばあちゃんに張り合いをなくす「私」の気持ちを表している。

4 次の文は、線部③のように「私」が考えた理由をまとめたものである。I・IIにそれぞれ十字以内の言葉を考えて補い、文を完成させよ。

おばあちゃんに I 気持ちと、おばあちゃんに II 気持ちとの間で揺れているから。

5 線部④とあるが、おばあちゃんが「笑い出した」のはなぜか。「私」の言動がどのように変化したかについて触れながら、四十字以上五十字以内で書け。

問題は次のページまでつづく

5

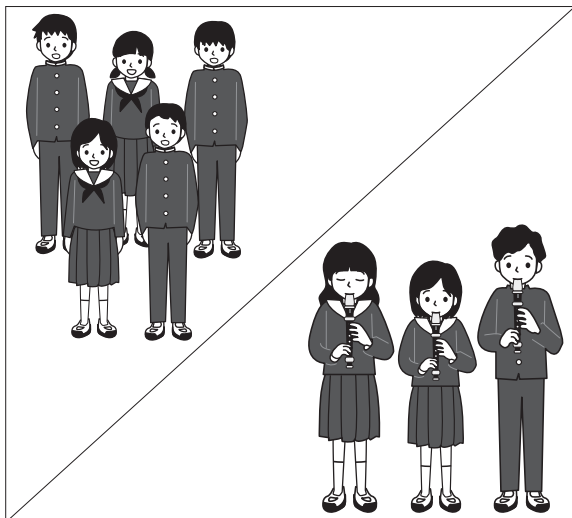
海外の姉妹都市から来る留学生のために、校内の施設や教室が何に用いられるのかがわかるような掲示をすることになり、音楽室については、あとの二つが候補となりました。候補A、Bのどちらを掲示するとよいと考えるか、あなたの考えを書きなさい。ただし、次の(1)～(5)の条件に従って書くこと。

条件

- (1) 二段落で構成すること。
- (2) 第一段落には、候補A、Bのどちらを掲示するとよいと考えるか、あなたの考えを書くこと
- (3) 第二段落には、第一段落のように考えた理由を、二つの候補を比較しながら書くこと。
- (4) 六行以上八行以下で書くこと。
- (5) 原稿用紙の正しい使い方に従って、文字、仮名遣いも正確に書くこと。

候補B

(中学生が歌ったり楽器を吹いたりしているイラスト)



候補A

(ト音記号のイラスト)

